

アフリカに暮らす

伊藤忠商事 ナイロビ事務所長
(兼 伊藤忠ナイジェリア会社 社長)

こうの しげる
高野 茂



当事務所前にて筆者

＜アフリカとの関わり＞

「君に海外駐在に行ってもらったことになった。行先は非常に驚くかもしれないが、アフリカのケニアというところだ」。大阪本社で繊維機械を担当していた私に上司から晴天のへきれきのような話があったのは1993年の夏。大学でロシア語を学び、ソ連貿易の仕事がしたくて商社に入社した私にとって、1991年末のソ連邦崩壊は私の運命も大きく変えることとなった。それまで



マサイマラ国立公園

アフリカに足を踏み入れたこともなければ業務で交信をしたことすらもなかった私にとって、上司から言われた駐在地がどんどころなのか、どんな仕事をするのか全く想像もつかない。それでもイヤだという気持ちは全く起きなかった。これが私の会社人生でのアフリカとの関わりの始まりである。ケニアで最初の海外駐在から帰国し、その後ロシアにも駐在するが、南アフリカを挟んで2010年7月から2度目のケニア勤務をすることとなった。結局、会社生活の中でアフリカが通算海外勤務は一番長くなり、また20代の若かりしころに最初の海外勤務をしたケニアに今度は家族と共に、主管者として戻って来られたことは非常にうれしくもあった。

＜アフリカの多様性＞

大多数の日本人が「アフリカ」と言った時にどのようなイメージを持つだろうか？ 筆者の知る限り、これだけ情報メディアが発達した現代に至っても、やはりアフリカというと暑くて過酷なところ、やりを持ったマサイや野生動物

が闊歩^{かっぽ}し、病気がまん延して治安が悪く危険、というネガティブなイメージだけに塗りつぶされてしまっているように思う。そういった場所や面があるのは事実だが、それらはアフリカのごく一部を示しているにすぎないし、また一言でアフリカといっても国の数だけで54ヵ国、非常に多様な文化、多数の言語、部族が存在する。私は人類学の専門家ではないが、アフリカ大陸の黒人といっても、南北東西を比べただけでも肌の色も気質も体格もまるで違う。気候も南アの爽やかな地中海性気候から野生動物の楽園サバンナ、一年を通じて高温多湿の熱帯雨林、乾燥した砂漠地帯とさまざまである。興味深いことに地球上の大陸で南北両回帰線と赤道がみな通過するのはアフリカ大陸だけ。この事実はアフリカ大陸が一年を通じてどこかで豊かな降雨と日照に恵まれた大自然あふれる大地であることを意味している。こんなアフリカに、ケニアに、ぜひ一人でも多くの日本人に来て見て知ってほしい、そんな思いを込めて、当地の仕事・生活環境を紹介する。

＜ケニア人気質＞

私の知る限り、ケニアを含めた東アフリカの黒人の人たちは概して非常に穏やかで陽気でフレンドリーである（ここであえて黒人の人たちと言ったのは、当地に歴代住み着いているインド人や白人などの外国人を除いた根っからの現地の人たちという意味である）。仕事ではポレポレ



ナイロビ国立公園のライオンの母子



アンボセリ国立公園から見るキリマンジャロ山

（スワヒリ語でゆっくり）といわれるくらいのんびりし過ぎているのは困ったことなのだが、旅行者にも居住者にも外国人には大抵にっこり笑って接してくれる。スワヒリ語というのは日本人にはとても聞き心地の良い言語で、母音・子音が日本語に近いので耳から聞いて単語を覚えやすい。文章がしゃべれなくても片言の単語を覚えて使ってみるだけでも当地の人たちはとても喜んでくれる。

ここ数年でケニアも自動車が非常に増え、道路インフラの整備が追いつかないナイロビ市内では朝晩の渋滞はひどくなる一方。当地では歴史的に交差点は信号を使わずに、交差点を中心に車が時計回りに通過していくラウンドアバウトと呼ばれる方式が多い。しかし交通量が増大するとともにラウンドアバウトも機能しきれなくなり、信号を設置したり交通警官が交通整理をしたりしているが、これがまた機能しておらず、市内幹線道路の大きなラウンドアバウトが3つ連なる区間では朝晩の大渋滞のため交差点の前で5分も10分も待たされることはざら。ところが交通警官の下手くそな交通整理のためにこれだけ待たされてもクラクションを鳴らす運転手はまずいない。私の兼務しているナイジェリアや他の新興国の道路渋滞では考えられないことである。

そのような陽気で穏やかなケニア人であるが、これが別の場面では全く異なる性格を見せる。税関やイミグレ、警官などの官憲・公官庁職員



ナイロビ郊外の一面のパイナップル畑

の傲慢な、あるいは意図的な業務遅延で賄賂をほのめかすような態度に業を煮やす思いをするのは、われわれ居住者のみならず短期の出張者・旅行者でも例をあげれば枚挙にいとまがない。新聞報道でも政府高官や国会議員の汚職が連日のように紙面をにぎわせる。どうやらこの国では公権力に就いた者がその権利を行使して私的利得を得るのは当たり前と思われているようだ。「It's our turn to eat.」というケニア人汚職撲滅活動家を描いたノンフィクションがある。権力を得るまでは民主化の闘士といわれた改革派リーダーが、権力の座に就いた途端に「今度は俺たちが利権をむさぼる番だ」と言わんばかりに豹変し、自分たちの悪事を追及するものに対して弾圧を加えるようになってしまう。こういった役人の腐敗や組織の硬直性の負の面だけを見ていると、生真面目な日本人の感覚からは到底ついていけず嫌になってしまうのだが、



北モザンビークのゴマ収穫風景



バナナを担いで買い物に出かける女性たち

誰しもが多かれ少なかれこういった二面性を持っているように思う。清濁併せのむ、というのはちょっと違うが(不正を許容するわけではないので)、同じ人間がどう見ても別人としか思えないような特質を示すことがあるという文化・事実を受け入れることが、当地でフラストレーションを起こさない秘訣だと思っている。

＜現地邦人社会の活動＞

ナイロビに着任して1年もたたない2011年春、ナイロビ駐在2度目という経歴を買いかぶられたのか図らずも私を日本人会長にとの話が持ち上がった。最初は固辞しようとしたが、いつの間にか周囲が私でという意見で固まっている。上司に相談したところ頑張れと背中を押していただいたこともあり、腹を決めて引き受けることにした。

当地には大使館に在住登録をしているベースで約800人の日本人が居住している。この人数は1,000人を優に超える在留邦人を数える南アあたりに比べれば小さいが、南アの場合は複数の大手自動車メーカーが製造拠点を進出させていることを考えれば、ケニアのこの数はサブサハラの人社会としては結構大きな所帯である。また長らく当地に住み着いて起業されたりしている方が多いのも特徴か。山崎豊子の小説「沈まぬ太陽」のモデルになったと思われる実在の方が、今も何名か当地にご健在でおられるのも面白い。

当地の日本人会には在留邦人の約半分が加入している。ケニアの場合、首都のみならず地方に居住している邦人も多く、ナイロビでの通常の日本人会の活動にはなかなか参加しにくいこともあって参加者比率を上げるには限界もあるのだが、会員相互の交流・親睦を深めるべく、懇親会や運動会、「ふれあい祭」といわれる秋祭り、新年会等々、年間に各種行事を開催している。2011年4月は東日本大震災の直後に「がんばれ日本!」と題して震災・津波被害への義援金を募るチャリティーバザーを実施。200万シリング(約190万円)を超える義援金を集めることができ、日本大使館の被災地向け義援金口座を通じて寄付させていただいた。

昨今は隣国ソマリアのイスラム過激派の活動の影響や、2013年春に大統領選挙を控え、ナイロビ市内、あるいはモンバサなどの観光地でも治安悪化が懸念されているが、治安対策の基本はむやみに恐れおののくのではなく、一人一人が正しい情報・知識を常にアップデートしておくことと考え、日本大使館および日本人会の共催で邦人安全対策協議会を定期的に行っている。

また日本人会活動目的の一つとして、邦人子弟の教育施設としてナイロビ日本人学校を設置し、その運営支援をしている。当地日本人学校の生徒数はここ数年30人から40人前後。学校経営を維持するには決して楽でない小さな規模ではあるが、それだけに日本の大都市の中小



日本人会幹事メンバー一同(手に持っている布は東日本大震災チャリティーバザー「がんばれ日本!」で作成した寄せ書き)

学校では到底かなえられないゆとりある密度の濃い対話が可能で、また赴任してこられる先生方も日本各地から志高い指導者が志願して来られるだけに、授業のレベルも高い。卒業した生徒さんたちの中には日本へ帰国受験して有名難関校にパスしたり、さらに海外の高校・大学に進学する生徒さんも少なくないと聞く。前述の日本人会行事は運動会など日本人学校の施設を利用して開催することが多いが、小学1年生から中学3年生まで年の離れた子供たちが手を取り合い助け合って演技・競技をする姿はほほ笑ましく感じさせられることが多い。縁あってケニアの学舎に過ごすことになったお子さんたちが、やがて日本の将来を担い国際社会に羽ばたく人材となることを祈ってやまない。

＜日系企業の動向とケニアの将来＞

日本人会とは別にケニア日本商工会という組織がある。構成員は日本大使館、日本貿易振興機構(JETRO)、国際協力機構(JICA)など当国に所在する日本政府関係機関、および日系民間企業からなり、現在の参加数は27団体。2011年度の日本人会長に続き、2012年度ははばかりながら私が商工会長を拝命している。

過去十数年のスパンで見ても、当国に進出する日系企業の事務所・駐在員数はじりじりと減少してきた。現地にベースを構える旅行代理店などを除くと、日本の本社から駐在員を派遣してきている企業は大手商社と建設業、一部の



ケニア日本人会ふれあい祭



ケニア日本商工会のコーヒー加工工場視察



タンザニア・キゴマのコーヒー豆天日乾燥工程

メーカーといったところで、そのほとんどが本社の Liaison Office。かつてはどの商社も多かれ少なかれ ODA ビジネスに携わり、建設業もいわゆるスーパーゼネコンが拠点を張っていたが、ODA 業界の激変により多くはこのビジネスから撤退。2000 年前後は大手商社も自動車あるいは特定の Commodity 商権、プロジェクトを持っているところでないと業容の維持が難しく、陣容の縮小、あるいは拠点の閉鎖に追い込まれるところが相次いだ。この 2-3 年、日系企業の縮小傾向もようやく底を打ち、じわじわとではあるが再び拡大機運にあるように見える。いったんは事務所を閉鎖した企業の再開や新規参入。事務所から支店、あるいは現地法人への業容展開。既存各社の駐在員数も一人事務所から徐々に複数体制を置くところも増えてきた。当国は金属・エネルギー資源がなく、また日系メーカーの現地製造もないため、進出企業の裾野がなかなか広がりにくいのが実情だが、アフリカ大陸という広大な市場で南アに次ぐ拠点をどこに置かかということを考えたときに、ケニアは日本人にとって、日系企業にとって、地勢的にも文化的にも入りやすいところであろう。長い援助の歴史もあってかケニア人の対日本人観は概して良好。また新車販売台数の 70% 以上を日系自動車メーカー 4 社で占めるほど、日本のテクノロジーはまだまだ信頼と尊敬を得ているといつてよい。さらに東アフリカ 2 億 4,000 万人市場へのゲートウエーとしての位置付

けを考えてみたときに、ナイロビをハブとするケニア航空のおかげで東アフリカ域内は言うに及ばず、アフリカ各地や欧州・中東へのアクセスも容易である。

サブサハラ各国の国内総生産は 1 位南ア、2 位ナイジェリア、3 位アンゴラと資源国が続き、4 位の座は 2011 年産油国となったガーナに残念ながら奪われてしまったが、この後 5 位にケニアが入る。エネルギーも金属資源もないケニアが観光業と農業を主たる産業として、資源国に伍して堂々第 5 位につけていることは立派なことであると思う。最近ではケニアにも北部乾燥地帯に石油の埋蔵があるらしいということを政府関係者は狂喜して訴えているが、仕事は別として、個人的には私は石油なんか出ない方がこの国の幸せだと思っている。石油が出た途端に人は額に汗して働かなくなり、物作りに精を出すよりもあぶく銭にしがみつこうになる。資源による富は社会に公平に分配されるところか一部の階層のみが恩恵を独占し、貧富の格差はますます拡大、人心がすさんでくるとするのは先に産油国となった国々の例でも明らかである。2013 年の TICAD V 開催を前に、日本のアフリカ向け投資・貿易拡大が叫ばれているが、国の特性を生かした物作りとそれに資する人材育成に力を入れることでアフリカはもっと発展できると思うし、自分もそういった観点から日系企業の一員としてこの地域の成長と繁栄に貢献していきたいと考えている。